

福士幸次郎(ふくし・こうじろう)☆常設展示作家

1、福士幸次郎の生涯

<生涯1 詩人誕生以前> 0歳～19歳 1889～1908

明治22年11月5日、青森県弘前市本町59に父慶吉(大工兼役者)、母ハルの4男として生まれた。8～10歳時まで舞台に立ち、各地を巡業した。34年11月、父死去。長男民蔵が帰郷し、一家を支えた。36年県立第三中学校に入学。経済的には恵まれなかった。37年、日露開戦、民蔵が召集されて山形へ、その後母も赴く。一人青森に留まった。38年、教師と衝突し、退学。母のいる山形に行き、家庭的幸福を初めて覚える。この頃から文学書を耽読し始めた。8月上京、開成中学校2年に編入学したが、田舎者とからかわれ、39年退学。4月「白百合」に短歌を発表。戦地より帰り上京していた民蔵の世話で10月国民英学会に入る。この頃、民蔵を介して秋田雨雀を知る。

<生涯2 詩人前期(口語自由詩の開花)> 20歳～25歳 1909～1914

明治41年雨雀の紹介で、佐藤紅緑のもとに寄寓。42年5月、自由詩社の「自然と印象」第1集掲載の福田夕咲、三富朽葉の詩に強い印象を受け、詩作を始めた。12月、同誌第8集に「錘」など5篇を掲載。43年「創作」等に詩を発表し詩壇にデビューした。自活の道を探したが、失敗に終わり、放浪の旅に出た。45年立ち直り、初期の代表作「鍛冶屋のポカンさん」などが生まれた。12月詩誌「テラコッタ」を創刊。大正2年「生活」を創刊し、人道主義に光明を見出し、生命力にあふれる詩を生み出していく。3年4月、これまでの詩を収めた第1詩集『太陽の子』を刊行。これらの口語自由詩は、詩壇に影響を与え、先駆的役割を果たした。

<生涯3 詩人後期(現実から古典へ)> 26歳～30歳 1915～1919

大正4年11月、江馬修と「ラ・テール」を発刊。5年2月同誌に幸次郎が第2詩集とした「恵まれない善」を発表する。これらの詩篇は『太陽の子』以後の詩を収録したものである。この頃から人道主義に空虚さを感じ、現実を凝視した詩「この残酷は何処から来る」など現実主義の作風に変化していく。6年、三富朽葉・今井白楊が溺死し、打撃を受けた。7年、紅緑の長男八郎を伴い、小笠原島に赴く。

8年、交際があった女性との破綻と、地方主義との関心が重なり、詩筆を折る決意をした。11月片岡梅枝と結婚。7～8年にかけて「展望」などの詩を発表し、古典主義的詩風に立った。また弘前市で結成されたパストラル詩社の指導に当たった。

<生涯4 地方主義思想の実現への道> 31歳～43歳 1920～1932

大正9年6月、第2詩集『展望』を刊行。6年頃から伝統主義に注目していた幸次郎は、12年暮れ関東大震災で家を失い、津軽に帰郷し、伝統主義を根底にした地方主義運動に取り組み始める。13年1月「地方文化パンフレット発刊の趣意書」を公にし、同パンフレットを2号まで刊行。地方主義に関する論文を次々に発表し、15年2月、「地方主義の行動宣言書」を発表し、その現実化を図った。15年青森日報社に主筆として入る。この時、高木恭造に方言詩を指導、後に方言詩集『まるめろ』に結実した。昭和2年上京。4年「自由詩の発達とその研究」、5年「日本音数律論」など独創的な音律、音数律論に関する多くの論文を書いた。

<生涯5 日本古代文化探求に向かって> 44歳～56歳 1933～1946

昭和8年、伝統主義の一環として、日本民族の伝承に強い関心を持ち続けてきた幸次郎は、約半年にわたり、甲信越から越前まで回り、古い砂鉄の採集地、民間伝承などの踏査をした。この頃から短歌の研究をも続々と発表し始めた。代表的なものに「多摩短歌の形式」などがある。10年信越姫川溪谷に逗留し調査した。13年には紀州に入り、約1年間踏査し、帰途半年は琵琶湖西海岸各地を調査した。古代日本と鉄の文化の研究書として17年5月『原日本考』、翌年9月『原日本考続編』を刊行。17年10月には、これまでの地方主義論を収録した『郷土と観念』を刊行した。18年日本伝統研究所設立。1月「伝統」創刊。21年10月11日千葉県館山市で病のため死去。

2、福士幸次郎の代表作

○詩集『太陽の子』

第1詩集。大正3年4月8日発行。発行所、洛陽堂。四六判布装厚表紙。装幀木村莊八。扉に「太陽の子」と自筆。自費出版。700部。定価90銭。献辞1頁（「兄と母に此の作集を献ずる」とある）、目次6頁、自序15頁、本文216頁。「錘」、「記憶と沈黙」、「心」、「太陽崇拜」の4章からなり、明治42年から大正2年までの詩47篇を収録している。自序で、この詩集を「自分の全生命を尽くして踏んできた片身」と記している。

作品の傾向は、自然主義の影響下の暗澹たる魂の彷徨、暗い思念を象徴的に表現した詩篇と、虚無観念から脱却し、人道主義に光明を見だし、自己愛、生の叫び、魂の成長を表現した詩篇に大別される。前者の代表的詩として「錘」、「鍛冶屋のポカンさん」、後者の代表的詩としては「発生」、「私は太陽の子である」などが挙げられる。その口語自由詩は、詩壇に先駆け、多大な影響を与え、口語詩の出発点となった。

○詩集『展望』

第2詩集。大正9年6月10日発行。発行所、新潮社。四六判紙装厚表紙。装幀工藤信太郎。700部。定価1円20銭。題詩1頁 A elle, Tu es mon guide... Dante(Enfers, II, 140)、著者の序4頁、序詩「展望」7頁、目次6頁、本文158頁。第1, 2, 3編に分けられ、『太陽の子』からの再録詩17篇、『太陽の子』時代の詩4篇、大正3～8年までの詩34篇、計55篇を収録している。序で「抒情詩主義時代と現実主義時代との二段に変遷し来った私の詩的閱歴の二期とすれば、(中略)現在はその三段の変化たる古典主義時代とも称すべきもの」と作風の変遷を概括している。いわば、この詩集は、幸次郎の「生の完全な具現物」(同序)かつ一貫した魂の生長の軌跡を表現したものといえる。更に幸次郎の詩の集大成という意味でも価値があり、また詩業のほぼ全貌を知ることができる点でも貴重な詩集である。

○評論集『郷土と観念』

昭和17年10月15日発行。発行所、育成社弘道閣(新世代叢書33篇として刊行)。新書版紙装。装幀亀倉雄策。3000部。定価80銭。口絵写真4頁、序4頁、目次2頁、本文159頁、跋30頁、「郷土思想の根底」・「地方主義前論」・「郷土愛の話」・「文化主義と伝統主義」・「哲学の使命」・「土地の愛」・「地方主義者の抗議」・「郷土文学主張の基礎」・「田舎での瞑想」・「津軽地方特有の俚諺」の10篇を

収録。「本書公刊に際し地方主義者としての回想」として題された跋の中にある地方主義の行動宣言で、「マルクス主義者、物質主義は人間は経済利害の一致する点で、階級的に結びつく」が、「人間相互の社会結合及び社会統制は、祖先伝来の精神的秩序、闘争を外にしては決して結びつくもの」ではないと批判し、地方主義の任務は、地方の固有な立場にたつて発達させる事にあると述べている。幸次郎の地方主義・伝統主義の思想的立場を知るのに欠かせない論集である。

○研究書『原日本考』・『原日本考続篇』

『原日本考』昭和 17 年 5 月 15 日発行。発行所、白馬書房。B6判紙装厚表紙。3000 部。定価 2 円 50 銭。『原日本考続篇』昭和 18 年 9 月 1 日発行。発行所、三宝書院。B6版紙装厚表紙。3000 部。定価 2 円 50 銭。正篇は口絵、献辞、序、目次、本文(1~16 章)。続篇は口絵、目次、本文、(17~27 章・結論)、跋、索引、正誤表。正続篇とも昭和 16 年 3~12 月に新聞「大民」に連載。正篇の帯に「鉄器文明と農耕形式を中心にして日本古代生活を探究す」とある。幸次郎は伝統主義の一環として、日本の古代鉄文化に着目し、日本固有の文化の根源を追究した。鉄の研究で鐸とズクとの二つが中心と考え、鐸の祭祀は鉄器使用、太陽崇拜、農業の主体を成すズク授与信仰の根本行事であり、帝王の聖職たる暦日管掌の起源との結論に達した。跋の中で、その目的を「内には日本伝統の徹明にあり、外には日本歴史の世界的関与性」と記している。その独創的歴史観は幸次郎の魅力でもある。

3、福士幸次郎のキーワード

<キーワード1 「太陽の子」>

大正元年末、「発生」、「すべての友達に送る手紙」を書くことで、新しい生に目覚め、自然主義の悪影響からの虚無観念と訣別し始めた。「日の子」を書き、光明の世界を見いだす。「自分の其真暗な心の中に薄いながらも或る消すことの出来ない光を感じて自分は斯んなにも人生には貴い美しいものがあるのだと思って、自分の暗い心に生きる意思が起こって来た」(「苦悩の实在」大5)と記している。翌年には詩集『太陽の子』の4章「太陽崇拜」に収録された詩篇が爆発的に生み

だされていく。「ボヘミアンの歌」・「航海の歌」・「太陽崇拜」・「自分は太陽の子である」・「ひかりを慕ふ歌」・「日本の文学者に与ふる歌」などがあり、それらの詩の中心的思想を表現した語が「太陽の子」或いは「光の子」であった。人道主義に光明を見だし、新生を図った幸次郎は「太陽の子」に、自己の未来の夢と、燃えてやまない光ある自己の魂の成長を託したのであった。

<キーワード2 「地方主義」>

大正6年頃、伝統主義に着目し、社会主義に論戦を張っていた幸次郎は、12月末、関東大震災のため帰郷。翌年1月、菊池仁康と連名で「地方文化パンフレット発刊の趣意書」を出し、地方主義運動を起こす。その要点は、(1)現今の文化主義が社会主義の御先棒に使われている、(2)国内文化が中央集権の悪弊に堪えられなくなっている、とし、国内文化の繁栄は地方固有の特質を発揮し、発達させるところにあると述べる。「地方文化パンフレット」2号まで発行。以後、精力的に地方主義論を発表する。15年2月「地方主義の行動宣言書」を発表し、8項目からなる行動プログラムと月刊雑誌「地方主義」・「地方主義パンフレット」の発行を公にした。大半は実現しなかったが、地方主義の主旨はかなり浸透した。幸次郎は、伝統の根本は徹頭徹尾不合理であるとし、人間の根底感情にこだわる思想を示した。地方主義運動は、高木恭造の詩集『まるめろ』などの優れた方言詩をも生み出した。

<キーワード3 「音数律」>

音数律研究の動機は、「大正6年当時乱雑果てしなき自由詩の状態にアイソが尽き、何か整理の方法がないかと思っていた処に(中略)口語の中の音数律を研究する必要がある。」(「日本音数律論」との意見に示唆を受けたとある。岩野泡鳴は『新体詩の作法』(明治40)において、従前から考えられてきた5音・7音の単位音数を2・3・4音を諧調の基礎的音数単位と分析した。幸次郎は、それを発展させ、4音を認めず、2・3音の2種類だけと考え、4音を発音するとき、意味にかかわらず2音と2音で切ることに注目し、切点と名づけた。2音は連続・速度性を示す、3音は渋滞・停止性を示すと考え、更に「撓ひ」という現象を発見した。「撓ひ」とは2音と3音が結合したとき、2音の連続・速度性が3音の渋滞・停止性により諧調の進行が停止することを言う。この2点により、日本における最初の体系的な日本語および日本語の自由詩の独創的リズム論を構築した。

4、福士幸次郎のゆかりの場所

①地方主義運動の拠点

青女子(青森県弘前市)

大正 12 年末一家を上げて帰郷した幸次郎は、板柳、碓ヶ関と居を移し、13 年 11 月青女子竹浪政夫方に移り住む。15 年 10 月青森日報社の主筆に迎えられ、青森市に転居するまで居を構えた。この地を拠点に、地方主義運動を精力的にこなし、東奥義塾の教師も勤めた。

「土地の愛」の中で、故郷で生活する喜びを率直に記している。

②第二の故郷

深川(双樹寺)(東京都江東区)

幸次郎は「青年時代には江戸の名残の最も保存されてゐる深川で経過し、この点第二の故郷をここと思つてみた」(「郷土文学主張の基礎」と記し、前期の代表作たる詩はここ深川で殆ど書いている。幸次郎は、兄民蔵の菩提寺である深川三好町双樹寺に葬られている。津軽が第一の故郷であるならば、いわば第二の故郷といえる。

③福士幸次郎の記念碑

善福寺境内(愛知県尾西市)

大正 11 年 2～3 月に渡り、尾張善福寺に滞在した。その時『原日本考』の想を得たという。没後、それを記念し、碑を立てた。第 1 記念碑(30 年 11 月)には「福士幸次郎先生原日本考発想之地」、第 2 記念碑には(31 年 5 月)「濃尾平野は日本のメソポタミヤであり、木曾・長良の両川はチグリス・エウフラテスにあたる」とある。

5、福士幸次郎の関連人物

☆福士民蔵(ふくし・たみぞう):長兄

1885(明治 14)年4・19～1962(昭和 37)年2・20。弘前市生まれ。幸次郎は初め寿平と名付けられたが、民蔵の反対で幸次郎と改められたとあるが、幸次郎との関係を象徴的に示している挿話である。人生の節目の折々を、また生涯に渡り、物心両面で支えたのは民蔵の存在であった。文学を最初に教え、幸次郎に秋田雨雀を紹介し、生涯の師にもなる佐藤紅緑との機縁も与えた。詩集『太陽の子』、詩誌「楽園」も、その費用を負担した。古代研究の踏査中も留守家族を支えた。幸次郎にとっては、一生頭の上がない恩人であり、信愛する兄であった。臨終の折り、幸次郎は「兄さんありがとう」と一言言って亡くなった。民蔵の愛なくしては詩人幸次郎は存在しなかった。

☆佐藤紅緑(さとう・こうろく):文学の師

1874(明治7)年7・6～1949(昭和 24)6・3年。弘前市生れ。本名治六。小説家・劇作家・俳人。幸次郎と紅緑との終生の出会いは、明治 41 年秋田雨雀の紹介で書生になったことから始まった。その後、紅緑から経済的援助を受けた時期もあり、幸次郎は紅緑には頭が上がり、深い恩義を抱き続けた。幸次郎は「佐藤紅緑伝」(昭和3)の中で「この二十年来先生を尊みもしたし、また愛されもして来た」と記し、また「本は唯だ一と筋、人間生活といふものを至甚に愛した人」と評している。この評は幸次郎自身にあてはまる評であり、文学の師であると同時に、人生の師でもあった。紅緑の幸次郎への弔句「死というのは再び秋の来ぬことか」。

☆三富朽葉(みとみ・きゅうよう):詩人仲間

1889(明治 22)年8・14～1917(大正6)年8・2。長野県武生水村生れ。本名義臣。明治 42 年人見東明らと自由詩社を結成。パンフレット「自然と印象」を発刊。象徴主義の影響を受けた倦怠的耽美的な詩を発表し、その口語散文詩は、先駆的作品として評価される。晩年は象徴主義から離れ、伝統主義的世界に移っていた。幸次郎は、「自然と印象」第 1 集に掲載された福田夕咲と三富の詩に感銘を受け、詩作を始めた。大正3年頃から今井白楊、三富に強い友情を抱くようになる。『原日本考』序で、三富から伝統主義の教義の内容を聞いて伝統尊重の念を起こしたとある。同年ではあったが、仏文学を教示し、文学者の根底を作ったのが三富であった。

6、福士幸次郎の資料紹介

○雪げ沼たゞよふハ樵の枯枝か

書画(短冊)

「津軽風景」の詞書で「雪げ沼たゞよふハ樵の枯枝か」の詩句。署名は不串(福士)。

○詩人協会解散意見書

著作資料

1931(昭和6)年1月頃

173 mm × 14,500 mm

「同封意見書の個條書」の表題による詩人協会解散意見書。詩人協会は昭和3年1月に結成され、昭和6年1月に解散した。

「室生犀星日記」に、「福士君の意見書人々の胸を打つ」とある。

○福田正夫宛書簡(大正 14 年3月 13 日付)

書簡

1939(大正 14)年3月

180 mm × 133 mm(× 4枚)

詩人福田正夫に宛てた書簡。当時福士幸次郎は一家を挙げて帰郷し、中津軽郡新和村青女子(現弘前市)の竹浪政夫村長方に居住していた。文末「こっちは未だ雪だ。今日なぞも大吹雪、淋しい村落を恵むこの毎日の雪の音、厳肅莊重を極めたものサ。」

○「地方の神々」

原稿

1906(明治 39)年

264 mm × 190 mm(× 10 枚)

「地方の神々」と題する草稿2種類。発表にいたらなかったと思われる。

『原日本考』関連の草稿か。(個人蔵)

7、福士幸次郎年譜

- 1889(明治 22)年…11月5日、青森県弘前市本町 59 に福士慶吉(大工兼役者)、ハルの四男として生まれた。
- 1890(明治 23)年…父が秋田巡業に失敗し、青森市に一家転住。
- 1901(明治 34)年…青森高等小学校に入る。11月父死去。上京中の兄民蔵が帰郷し一家の生活を支えた。
- 1903(明治 36)年…県立第三中学校に入る。
- 1904(明治 37)年…2月、日露開戦。民蔵が弘前に召集され、6月山形連隊へ。11月山形へ母も赴く。幸次郎は青森に留まり、アルバイトをし生活費補充。
- 1905(明治 38)年…教師と衝突。無断退学し、母と兄を慕って山形へゆく。民蔵満州に出征。義兄を頼り、単身上京し、開成中学校に編入する。
- 1906(明治 39)年…開成中学校を退学。この頃短歌を作る。戦地から帰った民蔵の尽力で国民英学会(夜間部)に入る。翌年秋田雨雀を知る。
- 1908(明治 41)年…国民英学会を卒業。雨雀の紹介で佐藤紅緑の書生となり、千家元麿、佐藤惣之助を知る。人見東明から、新しい詩を紹介される。
- 1909(明治 42)年…東明、加藤介春、福田夕咲らによる「自由詩社」のパンフレット「自然と印象」1集に感銘を受け詩作を始める。東明の推薦で同8集に「白の微動」等詩5篇を発表。
- 1911(明治 44)年…前年末、人生に絶望、紅緑のもとを出奔。放浪をし、半年後病をえて帰郷し静養。
- 1912(明治 45)年…詩作を再開し、盛んに書く。12月千家元麿と雑誌「テラ・コッタ」発行。
- 1913(大正 2)年…人道主義の思潮の影響を受け、盛んに詩を発表。木村荘太、荘八兄弟、元麿らと「生活社」創立、雑誌「生活」を発行。翌年

4月に第1詩集『太陽の子』を自費出版。

- 1915(大正5)年…前年、江馬修らと雑誌「ラ・テール」を発行。2月「ラ・テール」特別号に「恵まれない善」を特集、詩等15篇を発表。7月トルストイの翻訳『イワン・イリイチの死』刊行。
- 1917(大正6)年…詩作なし。2月トルストイの翻訳『イワンの馬鹿』刊行。評論活動盛ん。「詩歌」に「詩壇月評」を発表。親友今井白楊、三富朽葉が犬吠崎で溺死。強い打撃を受ける。10月増田篤夫と三富・今井の追悼録を編纂刊行。
- 1919(大正8)年…「苦悩」、「哀歌」などの古典主義的詩を発表。11月片岡梅枝と結婚。弘前市で結成した「パストラル詩社」の指導にあたる。
- 1920(大正9)年…6月第2詩集『展望』を刊行。詩論多し。
- 1922(大正11)年…詩誌「楽園」発行。詩作なく、専ら評論を書く。ユーゴーの翻訳を刊行。
- 1924(大正13)年…関東大震災に遭い、前年12月津軽に帰る。1月「地方文化パンフレット発刊の趣意書」を公にし、地方主義運動を始める。「地方文化パンフレット」を2号まで発行。
- 1926(大正15)年…2月「地方主義の行動宣言書」発表。「青森日報社」の主筆となる。翌年上京。
- 1930(昭和5)年…音数律論を多数発表。
- 1933(昭和8)年…この頃より、古代文化研究のため地方踏査に情熱を傾ける。
- 1942(昭和17)年…これまでの古代文化研究をまとめた『原日本考』・『原日本考続篇』(18年)、伝統主義・地方主義論を収録した『郷土と観念』刊行。
- 1943(昭和18)年…那須辰造・宍戸儀一らと日本伝統研究所を設立し、1月機関誌「伝統」発行。
- 1946(昭和21)年…10月11日、病のため千葉県館山市で死去。